



Liberia Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済  
©1980 精道教育促進協会(青屋)三・二四五二 芦屋市船戸町12-6

# 教皇様の敵

## 『日々の悲劇』を『日々の微笑』に

### 神への愛のために、喜びをもって仕事を果そう

学生大会会長の言葉から、皆さん方がローマで過ごしておられるこの数日間の概要を掴むことができ、また、皆さん方の心に燃える理想や抱負を知ることができました。

私個人とペトロの後継者としての全世界に對する私の職務に示してくださった敬愛に心から感謝します。

皆さん方は世界から集まった二一七もの大学の代表者だと聞きました。そのこと自体がキリスト教信仰は普遍的であることを明らかにしめています。この普遍性はいつも簡単に実現できるわけではありません。事実、学生諸君の焦慮についてはよく知っています。しかし、勉強を通して学問・教養を身につける雰囲気の中でキリストの証人たれという、キリストから託された責任を自らとらうと決意している若者たちのこともよく知っているつもりです。(…)

諸民族間の一致と結束を実現させるために世界中で私われている努力について考えて欲しいのです。空しい言葉のたわむれで終らせ

ないためには、このような努力はどのような価値にもとづくべきだろうか。皆さん方をみてもわかるようにかくも多様な民族や文化をどのような理想によって協調させることができるのだろうか、と。

諸君は、啓示されたことから、および人間は神にいかに応えるべきかをキリストに求めておられる。私はそのような努力をみて元気づけられるのです。

### キリストを見つめる

みなさん、一番大切なことはキリストを一所懸命に見つめることです。神のご計画は、キリストの秀でた人格とその死と生命がもたらす救いをもとにして、「キリストの下にすべてを集める」(エフェソ1・10)ということでした。特に主のご受難はこの計画を一層はつきりさせてくれます。人間の弱々しい本性に、より近い容ぼうでキリストは私たちの前に姿をあらわされます。教会は、「くるしみの人、くるしみになれた人」(イザヤ53・3)と

して、十字架にかけられたイエズスを指し示しますが、イエズスは同時に死者の中から復活し、私たちのためにとりつごうと常に生きる(ヘブライ7・25)お方でもあります。

私、教皇がみなさんの注目を喚起したいのはこのキリストなのです。人間の罪ゆえに十字架につけられ、私たちの救いのために復活されたキリスト(ローマ4・25参照)、すべてのものの中心、すべてが目標として向うべき中心キリストであります。「私は地上からあげられてすべての人を私のもとに引きよせる」。

みなさんが、王旗(御受難の典礼聖歌参照)とも言える十字架に希望を託しておられることは承知しています。どのような事情のもとにあっても、つねに、キリストが十字架を通してお与えになる知恵を十分に吸収してください。十字架の経験から常に新鮮で清められた力をひき出してください。十字架を支えにすればこそ、キリスト信者であることの大きな喜びを大勢の人々に伝えることができるところです。

### 神との親子関係

十字架につけられ、高く掲げられた十字架のことを黙想すると、「瀕死の体がりつけられた十字架の木は教えを垂れる偉大なる師の教壇となった」(ヨハネ福音書について119・2)と説明する聖アウグスチヌスのことばがふたたび心に浮んで来ます。考えて、「こんなさい。いかなる声、いかなる思想家が、人間間、民族間の一致をうちたてることができると言えるでしょうか。ご自分の生命を捧げ、私たちが神の子としてくださったお方しかできないのではないのでしょうか。神との父子関係はキリストが十字架上でかち得てくださったもの、また聖霊をおつかわしになったとき実現されたものであります。この父子関係こそあがなわれた人類が一致するための確固不動の基礎となるのです。

### 悪は人の心から出る

皆さん方の大会では、神から離れた社会がどのような苦しみや困難を体験するかについて強調されました。キリストの知恵があれば、この世の悪の根本的な原因をすぐに見つけることができるでしょう。また、今日の学友、明日の職場の同僚、すべての人々に、悪は「人の心から」(マルコ7・21)出るといいうイエズスの教えを告げ知らせることができるといいう。社会的な要素のみを分析しても始まりません。正義と平和をもたらすためには悪の根源が人の心の中にあることを知らねばなりません。したがってその対策も心から出なければならぬのです。ふたたび申し上げたい、心の扉はキリストの愛からでる偉大で決定的なみ言葉、つまり十字架上での御死去にたいしてのみ開かれるべきです。

主が私たちをお導きになりたいのはここ、私たちの心の中なのです。復活祭に先立つ時期には絶えず改心が叫ばれています。そこにこそ真の知恵がみつかるからです。「主をおそれることは知恵の完成である」(集会の書1・16)

### ゆるしの秘跡は自由と与える

みなさん、勇気をもって痛悔しましょう。勇気をだして、ゆるしの秘跡にあずかり神の恩恵をうけましょう。告解の秘跡は私たちを自由にしてくれます。また、社会において、教会において、人々に仕えるための種々の事業をおしすすめる方はこの秘跡によって得ることができのです。事実、キリスト信者の真の奉仕的な活動のねうちはそのような活動を通してはたらく神の恩恵いかに基準にして評価されます。キリスト信者の心の平和は喜びと密接な関係があります。ギリシャ語の語源をみると「喜び」は「恩恵」に近いことばです。十字架をも含めたイエズスのみ教えはすべて、「(神の)よろこびがあなたたちにあり、

あなたたちの心が喜びに満たされるため(ヨハネ15・11)なのです。キリスト信者の心の喜びが人々に「ふりまかれる」とき、そこには、希望と楽観、日々の疲れをもともしない寛大さが生まれ、それは社会全体にひろがってゆくのです。

仕事と聖性

諸君、喜びと平和のもとである神の恩恵に保っているときのみ人々に役立つことができます。このようにキリスト教的な素晴らしい展望に立ってみなさんがたの学生としての使命を考えてください。現在の勉学も将来の職業も、神との出会いの機会、兄弟である人々への奉仕の道となるでしょう。言いかければ、聖化の道となるのです。これについて

『私のぶどう園へ行って働きなさい』

あなたの返事は?

マテオの福音書の二十一章にたいそう興味深いたとえがでてきます。それは、ある意味で、性格研究のような面をもっていると言えらるでしょう。また、この章は、注意深く自己を見つめたい人々のために書かれたともいえます。前後して、「息子よ、今日は私のぶどう畑へ行って働きなさい」(マテオ21・28)と父からいわれた二人の若者の態度にはいろいろと考えさせられます。一人はただちに承諾はしましたが、言われた通り実行はしませんでした。もう一人は最初、「いやです」(マテオ21・29)といったものの、あとで思いなおして、働きに行きました。「この二人のうち父の思いどおりにしたのはどちらのほうか」(マテオ21・31)とイエズスはおたずねになりました。その答は簡単です。

「マテオの福音書の二十一章にたいそう興味深いたとえがでてきます。それは、ある意味で、性格研究のような面をもっていると言えらるでしょう。また、この章は、注意深く自己を見つめたい人々のために書かれたともいえます。前後して、「息子よ、今日は私のぶどう畑へ行って働きなさい」(マテオ21・28)と父からいわれた二人の若者の態度にはいろいろと考えさせられます。一人はただちに承諾はしましたが、言われた通り実行はしませんでした。もう一人は最初、「いやです」(マテオ21・29)といったものの、あとで思いなおして、働きに行きました。この二人のうち父の思いどおりにしたのはどちらのほうか」(マテオ21・31)とイエズスはおたずねになりました。その答は簡単です。

「マテオの福音書の二十一章にたいそう興味深いたとえがでてきます。それは、ある意味で、性格研究のような面をもっていると言えらるでしょう。また、この章は、注意深く自己を見つめたい人々のために書かれたともいえます。前後して、「息子よ、今日は私のぶどう畑へ行って働きなさい」(マテオ21・28)と父からいわれた二人の若者の態度にはいろいろと考えさせられます。一人はただちに承諾はしましたが、言われた通り実行はしませんでした。もう一人は最初、「いやです」(マテオ21・29)といったものの、あとで思いなおして、働きに行きました。この二人のうち父の思いどおりにしたのはどちらのほうか」(マテオ21・31)とイエズスはおたずねになりました。その答は簡単です。

「マテオの福音書の二十一章にたいそう興味深いたとえがでてきます。それは、ある意味で、性格研究のような面をもっていると言えらるでしょう。また、この章は、注意深く自己を見つめたい人々のために書かれたともいえます。前後して、「息子よ、今日は私のぶどう畑へ行って働きなさい」(マテオ21・28)と父からいわれた二人の若者の態度にはいろいろと考えさせられます。一人はただちに承諾はしましたが、言われた通り実行はしませんでした。もう一人は最初、「いやです」(マテオ21・29)といったものの、あとで思いなおして、働きに行きました。この二人のうち父の思いどおりにしたのはどちらのほうか」(マテオ21・31)とイエズスはおたずねになりました。その答は簡単です。

外なる世界と内なる世界

「ぶどう園」は何を表わしているのでしょうか。「ぶどう園」は全体とその各部分との両方を意味します。それは、人間のため、つまり一人ひとりの人間のため、また全人類のために創られた世界全体のことです。ぶどう園はまた、それぞれの人に任された世界のある部分をも示しているのです。

「ぶどう園」は全体とその各部分との両方を意味します。それは、人間のため、つまり一人ひとりの人間のため、また全人類のために創られた世界全体のことです。ぶどう園はまた、それぞれの人に任された世界のある部分をも示しているのです。

親愛なるアルビーノ・ルチアーニ枢機卿は、ヨハネ・パウロ一世の名をもってペトロの座に召される少しまえ、次のように要約されました。「社会の真只中で街中や仕事場で、わたしたちは聖人になることができる」と主張する。神への愛のために、喜びをもって仕事を果し、仕事を「日々の悲劇」から「日々の微笑」にかえさせなければ(イルガゼッティノ、

一九七八年七月二五日)  
最後に、「十字架のかたわらに(ヨハネ19・25)立っておられる上智の座、聖マリアにお祈りしましょう。みなさんが十字架の知恵に耳を傾けるように助けてくださるでしょう。至るところで、福音の教えを実践し福音の証となることができるように、私は父として、使徒的祝福をおくりします。(一九七九年四月十日)



# 説教・講話・書簡等の抄記

になるのです。おん独子のおん父としておいでになるということなのです。他の方法ですと、おん父のご来臨は、地上における人間の歴史と同じように古く、これについては、啓示の最初の章、創世記の初めのページに述べられています。人間の最初の居所は内なるぶどう園でありました。私たちはその内なるぶどう園が人間に任された地、つまり外界を遺産として受け取ったように。(創世記1・28参照)

その同じ場所ではじめて、人間の歴史の中に罪がはいり込みました。原罪は、待降節の典礼が特別な注意を喚起する現実です。こういった背景を考えると、待降節中に祝われる無原罪のおんやどりの祝日の意味もよく理解できます。待降節には神の母に選ばれた処女に対するこの例外的特権が強調されますが、同時に、遺産として受け継いだぶどう園が、「いばらとあざみ」(創世記3・18)をばやしたまま放置されていることを思いださせてくれます。いばらやあざみは私たちの心のうちにもみられます。私たちの心もいばらとあざみを生い繁らせていると言えるのです。

内なるぶどう園での仕事は容易ではありません。ときどき、そこで働くために呼ばれる若者が辞退するとしても、別に不思議なことではありません。とはいえ、内なるぶどう園での仕事はどうしても必要であります。万一、そこで働かないとすれば人間は、自分のために創られた世界で罪を犯し、悪を生み出してしまふからです。そうなる内なるぶどう園において悪がはびこって勢力を増し、罪の範囲も拡大されていきます。私たちの住む社会はだんだん道徳的に毒されてゆくののです。ところで、罪による人間社会の環境破壊に屈服するようなことは、絶対に許されません。国旗を翻さなければならないのです。

## キリストによって人間に対する 神の呼びかけは完成された

イエズス・キリストとはどなたのことでしょうか。どうぞ、「急いで来てください」とお願いする御方のことでしょうか。ご降誕の祝日に先立つ待降節の典礼を通してお迎えを準備する、夜中にベトレヘムでお生まれになった方なのでしょうか。キリストとは、人間に対する神の啓示を完成された御方でありました。神が、文字通り「われらのうちに」おいでになったのです。もはや、創造のみ業、または神について語る被造物を通してでも、預言者や旧約の偉大な太祖のような単に神的真理を伝える人々を通してでもなく、もっと根本的で決定的な方法で神はわれらのうちにおいでになりました。神ご自身が人となられ、「人の子」としておいでになったのです。

イエズス・キリストこそは、人類全体および人間一人ひとりの歴史における、神のご来臨の完成で決定的な啓示であります。ご降臨とベトレヘムでのご降誕から、そのご生涯とみ教えを経て、十字架のご復活に至るキリストは、私も一人ひとりをみな決定的な仕方です。ご降臨とベトレヘムでのご降誕から、そのご生涯とみ教えを経て、十字架のご復活に至るキリストは、私も一人ひとりをみな決定的な仕方です。ご降臨とベトレヘムでのご降誕から、そのご生涯とみ教えを経て、十字架のご復活に至るキリストは、私も一人ひとりをみな決定的な仕方です。ご降臨とベトレヘムでのご降誕から、そのご生涯とみ教えを経て、十字架のご復活に至るキリストは、私も一人ひとりをみな決定的な仕方です。

## 自分のうちに

### キリストのみ業を見つけ出す

我々の内なるぶどう園と外なるぶどう園はキリストのご来臨のあとで大きく変わったことを知らなければなりません。神の「みことば」(キリスト)のみ業に照らされて、私たちの内と外のぶどう園は新しい姿をあらわしました。数々の聖なる秘跡の働きのおかげでそれは肥沃なぶどう園になりました。しかし、そ

れだけではなく、そこでの仕事ももっと楽になったのです。キリストご自身が「私のくびきは柔らかく私の荷は軽い」(マテオ11・30)とおっしゃったように。ところが、そこでの仕事はさらに大きな責任を負わせることにもなりました。キリストは「くびき」や「荷」ということばをお使いになったことから、この点はおわかりでしょう。

## ■大罪を犯したとき には、告解の秘 跡によって恩恵を とりもどすべき■

### 恩恵のうちに生きるよう努力しよう

今のようにたいそう重要で決定的な時期に、人生における個人的なぶどう園で働くよう招かれたみなさんは、一体どういう意味でそうしなければならぬのでしょうか。

ご降誕と神のご託身の使信に照らして、みなさんに次のことをお勧めしたいと思います。勉強において、または人類への奉仕や人間社会に対する愛の行為として選んだ、みなさんの専門職のための準備において、一つ真剣な約束をしてください。よく準備のできた、真剣で責任感の強い専門家が必要とされています。そのような人々に各人の生活と社会の将来が任されているからです。人類社会は、均衡がとれて円熟し、寛大で理解ある人、利己愛を克服している人材を必要としているのです。あなたがたにとっては、今こそ知育・徳育・情操教育のための貴重な時なのです。い

ずれ社会で果すべき義務、いずれ営む家庭生活

活に係わるつとめをしつかりと果すために、神がご望みになり教会も望むような父親、母親になるために、今から全情熱を傾けて励むべきなのです。信仰を深める努力を怠らないでください。種々の哲学から派生したさまざまな考え方や思想の多様性をみていると、自分の信仰に関する深く明瞭な知識と自覚が要求されていることがわかります。そうした、信仰を修行に移せなだけでなく、人びとに伝えることもできないでしょう。反キリスト教、非キリスト教的な考えからである緊張や危機を越えて、真剣に、かつ順序正しく啓示の中味を勉強しないなら、信仰と科学の間には矛盾のあり得ないことや、科学を現実にあてはめる、または適用させる場合には、必ず信仰に基いてなされなければならないことを理解することもできないでしょう。

あなた方はまた喜んで恩恵のうちに生きることを約束しなければならぬのです。イエズスがベトレヘムでお生れになったのはそのためでした。救霊に必要な真理を啓示し、恩恵の生活をお与えになるためであったのです。洗礼によって始まった神のご生命にあずかる生活をせひつづけてください。恩恵のうちに生きることは最高の品格を示す無限の喜び、平和の保障、すばらしい理想であります。同時に、キリストの弟子としては当然心すべき大切な義務でもあるのです。(…)

万一、弱さゆえに大罪を犯し、恩恵を失ったときには、告解の秘跡によって恩恵をとりもどさなければなりません。しかしそれには、痛悔と遷善の決心を伴った告白でなければなりません。イエズスは私たちに赦すためにおいてになります。キリストとの個人的出会いは一つの回心に変わるはずで、またその出会いは、一人の人間としての、あるいはキリスト信者としての、固有の責任を全面的に引き受けるため新たに生まれることにもなるのです。(一九七九・一二・一八)

# 不変の教え

## 源泉

要理教育は、常にその内容を聖伝と聖書の中に伝えられた神のことは生きた泉から汲み取る。なぜなら、第二ヴァチカン公会議は、「聖伝と聖書が教会に託された神のことは唯一の委託物をなす」ことを思い出させ、同時に、「みことばの務め、すなわち、司牧的説教、要理教育およびすべての型のキリスト教的教育が、聖書の同じことばから健全な栄養と聖なる力を与えられる」よう願っている。

聖伝と聖書が要理教育の源泉であるかのように言うことは、要理教育が原文そのものを不断に使用することによって、聖書的かつ福音的思想と精神と態度に浸透される必要があると言っただけでなく、要理教育が、教会と同じ理解と心でことばを読むだけ、また教会の二千年の精神と生活に導かれるだけ、それだけで豊かで、また効果的であることも主張するものである。(…)

### 忘れてならない要点

同教皇は、使徒的勧告「福音宣教」第三章に、福音宣教の本質的な点、あるいは生きた実体に言及している。それで、要理教育においては、これらの個々の要素は、統合されて一つの生きた全体のように考える必要がある。そこで、ここでは、ごく僅かな点を想起するにとどめる。例えば、児童、青年、信仰において進歩しているものに、「神について知ることのできることを知らせること」(ローマー・19)「あなたがたが知らないで、礼拝しているものを私はあなたがたに知らせる」(使徒行録17・23)と、彼らに、ある程度言えること、人とならされて、過越し、つまり、死と復活を通して、また説教とするしにより、さらに私たちの間における不断の現存の秘跡によって人間の救いを行っておられるみことばの秘義を簡単に説明することが(エフェゾ3・3参照)どれほど大事であるかは誰でも分かっている。シノドスの教父たちは、キリストを人

間性だけに、またその知らせを地上面だけに限ることのないよう、かえってキリストを神のみ子、私たちが聖霊において父に自由に近づいたための仲介者と(エフェゾ2・18参照)認めるよう要請したとき、正しく彼らは靈感を受けていた。

このキリストの現存の秘跡を信仰の光の下に知性と心に示すことは同じように重要である。これは教会の秘義である。この教会は、罪人ではあるが同時に聖者であり、そして「聖霊が神の教会を牧さするため監督として立てた人々」(使徒行録20・28)の指導の下に主が集めた神の家族を作る人々の集まりである。人類の歴史が、恩寵と罪および偉大さとみじめさのしるしとともにみ子イエズス・キリストにおいて神に取り上げられたものであり、「すでにいくらか新しい時代を表わしている」

## 『要理教育に関する使徒的勧告』第四回 源泉から汲みとられた全福音

ことを教えることも大事である。

最後に、自己放棄とともに喜びをもって引き受けた要求もためらうことなく説明する必要がある。聖パウロが、「新しい生命」(ローマ6・4)、「新しい被造物」(コリント後5・17)、「キリストとともにいるひと」(同右)、「イエズス・キリストにおける永遠の生命」(ローマ6・23)と言っていることは、そのような要求を伴っている。このような生命は、実はこの世界における生命と別なものではない。しかし、それは至福の徳に従って送られ、天における延長と変容を予定されているものである。ここで、要理教育において、福音に合った個人的な道徳の要求と生活と世界におけるキリスト教的態度とが重要になる。私たちは、これを、英雄的なものであれ、あるいは、ごく単純なものであれ、キリスト教的徳あるい

は福音的徳と呼んでいる。ここから同じように、要理教育がその信仰教育の務めの中で、ある問題をおろそかにすることなく、…適当に…説明する仕事が出て来る。問題と言うのは、人間の全体的な解放のための活動、より連帯的かつ兄弟的な社会の探求、正義と平和建設のための努力などがそれである。(…)

### 内容の完全さ

要理教育の教材または題材に関しては、今日、入念な考察を要する問題点が三つある。

第一は、教理の完全さそのものに関するものである。実際、キリストの弟子となるものは、その信仰の服従(フィリピ2・17参照)が完全であるためには、「信仰のことば」(ローマ10・8)を、そこなわれず、歪められず、弱められないで、本来の厳しさと力に満ちた完全なものとして受ける権利をもっている。

それである問題でメッセージの完全性を傷つけることは、要理教育そのものを無価値にし、キリストと教会が当然そこから期待できる成果を危うくすると同じである。マテオ福音書の中のイエズスの最後の命令、すなわち、「すべての権能は私に与えられた…すべてに民に教え…すべてを守るように教え…」日々私はあなたがたとともにいる」という言葉がある全体を指しているとしても、確かにそれは偶然ではない。なお、信仰によって自分に与えられた「イエズス・キリストの知識のすばらしさを見て」(フィリピ3・8)、「キリストの中にある真理による」(エフェゾ4・20以下)説教と教話を通して、より深くそれを知りたいと言う願いを人間がもっているときは、かりにそれが漠然としたものではあれ、どのような口実の下にも、この知識のどのよ

うな部分もこれに拒むことはできない。ところで、人間の創造とその罪、神の贖いの計画、その長く、優しい準備と実行、神のみ子の託身、汚れなくやどされ、終生処女で、霊肉ともに天の栄光に上げられた神の母——マリアと救いの秘義におけるその役割、私たちの生活の中に働く邪悪の秘義(テサロニケ後2・7)、これから私たちを解放する神の力、悔い改めと禁欲の必要、秘跡と典礼の行為、聖体の現存、この地上と死後における神的生命への参加などを全く取り上げないようなものが要理教育であろうか。それで、信仰の委託の中で、重要なものと重要でないと思うものを分け、あれば教えて、これは省くと言うように自分勝手に選ぶことは、真の要理教師の誰にも決して許されないのである。

### 適当な教育方法

第二に注意しなければならないのは次の点である。すなわち、要理教育の現状では、教育学的な方法論あるいは技術論によって、要理教育の豊かな内容が、ほかの方法よりこの方法で伝えられるよう勧められることもありうる。とにかく、授業の完全性は、教えられる真理と伝えられる規範と示されるキリスト教生活の道のそれぞれにふさわしい重要性を与える均衡の必要と調和的な、また階層的な性格を排するものではない。なお、要理教育において、ある教理をほかの人、あるいは、ほかの集団に伝えるには、ほかの用語がより良いことが認められる場合もありうる。しかし、このような教理の選択は、多少主観的な、またイデオロギーに彩られた臆説や偏見によるものではなく、無垢でなければならぬ教理をより深く知ろうとする謙虚な配慮による限り許される。それで、教育法と用語は「永遠の生命のことば」あるいは「生命の道」が、一部ではなく、全体が伝えられるための道具として用いられねばならない。

(枢機卿 里脇浅次郎訳 中央協議会発行)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十四円送料七百二十円 二十部以上の一括購入なら送料不要

振替 郵便 神戸 072393